

いし、自分たちの未来に取り入れる考えは当然生まれません。これまでのように講座も大事だが、もっと見て触れて使って「自然エネルギーっていいんだな」と心から思う人を増やしたい。見る、触る体験の場を仕掛けていくのは自分の役割だと感じている。先々週、コンサートのサブステージの電源を10時から21時まで100%太陽光エネルギー

でまかかった。コンサートなので集客があり、エネルギーや環境に興味のない人まで「太陽光電池って意外と使える！」と体感してもらえるチャンスだ。そうした体験をした人は他の場所で誰かに話してくれるかもしれない。今までの視点とは違った、自然エネルギーを身近に感じられる場を作っていきたい。

行政

避難者に寄り添いたい。他人事をいかに自分事のできるかが大切。

高島町

村上 奈美子 高島町生活環境課

取材日 2012.10.05

高島町は山形県置賜地方の東部に位置する。奥羽の山なみ深くに源流をもつ屋代川、和田川の扇状地に拓けた稔り豊かな美しい町。地味豊かな土地で稲作の他、さくらんぼ、ぶどう、りんご、ラ・フランスなどの果物も生産されている。東日本大震災で大きな被害はなかったものの、被災地から多くの避難者を受け入れ、宮城県からの火葬の受け入れを行なった。

3月11日 14時46分

役所で仕事に「あ、地震だ」と気づいた。最初はそれほど大きくないと思ったが、次第に揺れが大きくなった。ガタガタと細かい揺れではなく、ゆらゆらと大きい揺れだ。書類や物は落ちないが、なかなか終わらない。おそらく2～3分だが、とても長く感じた。すぐに停電になったので一斉放送などの避難の呼びかけはなかったが、庁舎は築40年で崩れる危険性があると各自が判断して外へ避難した。外に出て庁舎を見ると、今にも崩れそうだ。電線はぐわんぐわんと波打ち、駐車場の車はトランポリンに乗っているかのように飛び上がっていた。何度も余震がきたので、庁舎に出たり入ったりした。並大抵の地震ではないと思ったが、いったい何が起きたのか分からなかった。停電でテレビは映らず情報が入らない。携帯電話のワンセグで宮城県沖が震源だとうやく分かったが、他の県の状況は全く分からなかった。

15時半過ぎ、大きな揺れが落ち着いたので、各公共施設など防災担当地区の被害状況を確認した。生活環境課は火葬場も担当施設だ。電気が付かないので、火葬場は真っ暗だった。慌てていたため懐中電灯を持ってくるのを忘れてしまった。火葬場にはろうそくがたくさんあるので、ろうそくを使って被害の状況を確認した。

余震がきてもすぐに逃げられるように役所の隣の中央公民館1階に対策本部を設置した。高島町は建設クラブと防災協定を結んでいるため、発電機を持って駆け付けてくれて、情報収集等に必要



電力を確保できた。役所に戻ると、職員は情報収集で混乱していた。このままでは職員も帰れそうにない。地震後すぐに設置された災害対策本部に炊き出しの必要性を確認し、できる職員が自主的に炊き出しにまわった。緊急時の割り当てで住民対応窓口の課が炊き出し担当だったが、明確な指示がでなかったため、機能せず自主的に残った職員で対応することとなった。生活環境課では講座などで大人数の試食づくりを行なった経験があるので段取りは分かる。まずは米屋や個人商店を回って、炊き出し用の食料をかき集めた。ホームセンターやスーパーマーケットは水やコンロを買う人で混雑し、商品はあっという間に売り切れた。スーパーマーケットなどの混雑を予想し、個人商店に買い物に来た人も見受けられた。

役所に戻り、キャンドルづくり用にストックしておいたろうそくを災害対策本部や調理室に用意した。ろうそくの明かりを頼りにおにぎりを握った。18時半には東北電力との協定で役所周辺の電気が優先的に復旧した。また、救急車両や公用車を優先にガソリンを入れてもらい、夕方には全車両が満タンになった。次第に町の被害の情報が入り始めたが、これからまだ余震が続くのか、いったいどれほどの被害規模になるのか見当もつかなかった。

21時過ぎになってようやく対応が落ち着き、災害対策本部にあったテレビにふと目をやった。仙台平野を津波が遡上している映像が流れていた。最初は何の映像が全く分からなかった。夕方にはテレビが見られるようになっていたそうだが、炊き出しの段取りや油漏れの応急処置、一人暮らしで不安なお年寄りや携帯電話を充電したい住民の対応に追われ、テレビを見る余裕はなかったのだ。映像を見つめて、やっと津波が田んぼの方まで来ている映像だと理解した。「えーっ！こんなに飲みこまっちゃうな？！（飲みこまれていたの?!）」その映像を見て驚き、大変なことが起きていたのだと分かった。

ライフラインが止まって

高島町のライフラインの復旧は早かった。自宅は停電しなかったし、LPガスのため調理にも困らなかった。大きいボンベなのですぐなくなる心配はない。そうした緊急時にLPガスは強いなと実感した。地震以降、東京にいる息子と連絡が取れなかったのも、とても心配した。災害伝言ダイヤルはつながらず、安否を確認できなかった。携帯電話をかけ続け、地震の翌日に電話がつながり、ようやく無事を確認できた。

停電が続いている地域もあったが役所の近くは回復していたし、家屋倒壊など大きな被害はなかった。よそはすごいことになっているが、町の被害は最小限だと感じていた。

一番混乱したのはガソリンが手に入らないことだ。地震の次の日にはガソリンスタンドに行列ができた。1週間ほどは来ないだろうと思ったが、大部分が仙台から流通しており、ルートが新潟に切り替わるまで不足した。山形県は新潟県まで2時間ほどなので、ガソリンを買いに行く人もいた。自家用車は偶然、地震の2日前に給油したばかりだったのであまり困らなかったが、職員は数人で乗り合わせて出勤してガソリンの延命を図った。3月末からガソリン不足でゴミ収集車が走れず、可燃ごみの回収だけになった。通常に戻ったのは4月初旬だ。

それまで物がどこから来ているか意識したことは



避難者交流 パステル音楽隊

なかった。震災があって初めて、ガソリンが仙台を經由して流通していること、町内は3か所の変電所から電気が来ていることが分かった。これまで情報はあったのだろうが、仙台が止まると高島町まで全て止まってしまうことを実感した。

火葬の受け入れ

被災地から火葬の申込みが来ることが予想されるので、どのくらい受入が可能か県から問い合わせがあった。燃料（灯油）も限られているし、古い火葬炉が2炉しかないのも、午前中は町民優先、午後は被災者優先で対応した。

県が火葬場の連絡先一覧を出したのだが、こんなに混乱するとは想像できなかった。被災者からの電話予約を生活環境課の係で受け付けた。宮城県の山元町からの依頼が多かった。初めて受けた電話はすごく淡々とした声で、悲しみを受け入れられる余裕がないように感じた。普通はそうした場面では悲しみ打ちひしがれて涙声になったりするものだと思っていたが、とにかく目の前のことをしなければと混乱していて、悲しいという感情がまだ働いていないのかなと思った。電話を受けているこちらが涙を流してしまった。報道で死者・行方不明者数何万何千人と流れていても漠然としたイメージでしかなかったが、1人ひとりの命の積み上げでそうなっていることを実感し、とても辛かった。電話を受けるたびに感情移入していたらやっていけないのは分かっているが、悲しかった。子どもを亡くされた方の場合には特に切なかった。自分がもし、子どもに先立たれたらと想像すると本当に心が痛い。淡々とこなさなければならぬ場面もあるだろうが仕事だと言って割り切れないし、1人の人間として被災した方々に寄り添いたかった。だんだんと気仙沼や石巻からも問い合わせが来るようになり、4月初旬まで受け入れが続いた。

県外からの避難者の受け入れ

3月12日（土）に福島第一原子力発電所1号機で水素爆発が起きた時は、高島町も避難区域に入るかと思った。災害対策本部の職員にもしも全町避難になったらどうするかと話しても、そんなことにはならないという様子で全然考えていなかった。かなり情報が錯綜していたので、役所としては全く動けなかった。

個人で「六ヶ所村ラプソディー」の自主上映会に協力したことがある。六ヶ所村の再処理工場の仕組みを知らなければ、一般の方にドキュメンタリー映画は分かってもらえない。その時に自分も原子力発電について勉強したので原発の恐ろしさは分かっているつもりだったが、今回の原発事故で原子力発電所が高島町からそう離れていないところにあるのだと知った。

避難所は3月13日に閉鎖し、14日には片づけをする予定だった。ところが、月曜日の朝、役所が始まる前から郡山や南相馬から避難者が押し寄せた。高島町の被害は少なく通常業務に戻る予定で、職員はすっかり日常に戻ったと思っていた。すぐに避難所を再開したが、対応に追われ混乱した。防災計画の中では、町民が被災した場合の避難所として捉えていたから、他市町村から受け入れることはまったく想定していなかった。これが混乱やとまどいの原因だったと思う。

公民館のロビーに机を並べ、武道館に畳を敷いて寝る場所を準備した。避難所は1か所では足りなくなり、4か所設置した。その日のうちに温かいご飯を提供できたことはよかったと思う。

住民に食料の提供を呼びかけると米がたくさん集まった。越冬野菜や食品加工業者から食材の提供があり、田舎のほうが災害には強いと感じた。会社でまとまって避難してきたグループがあったので、避難所の立ち上げはとてもスムーズだった。混乱の中にありながら、会社の中のリーダーがリーダーシップをとって、そこに一般の方が一緒に炊き出しも「自分たちでできることは自分たちでやります」とおんぶに抱っこではなかった。しかし、別の避難所では不安を抱える人が多い中で、「自立して運営してください」と急をお願いされても難しいだろうと感じたので、給食の調理師に炊き出しに協力してもらい、「本職の人がくっから、給食のおばちゃんの指示通り野菜切ってもらえばいいよ」と言って、だんだんと運営を手伝ってもらえるようにした。最初は地元のボランティアを頼んだが、次第に自分たちで運営を始め、支援は食材の調達だけになった。こちらも少しずつ自立してもらえるように、後片付けの時に「だんだん皆さんでやるようにしてくださいね」とお願いした。

雪が降っていて外で子どもを遊ばせることができず、「子どもがうるさいって怒られた」と泣きながら相談に来るお母さんもいた。近くの小学校の体育館を開放してもらい、遊びのボランティアを頼んだ。

避難者は着の身着のまま避難して来るのかと思ったが、そんなことはなく、必要最小限の身の回りのものを持参された方が多かった。ライフラインが止まっているので、しばらく避難しようと思って来た人もいた。避難して来た人の状況に合わせて、対応できたと思うが、すべて希望を受け入れられた訳ではない。5月の連休明けに避難者が旅館などに移動し、避難所は閉鎖した。

ボランティアのコーディネート

住民から「何かされっことないか？（何かできることはないか?）」とボランティアの問い合わせがきたが、最初は受入体制が整わず要望に応えることができなかった。

社会福祉協議会のボランティアセンターに集約し、そこからボランティアを派遣することにしたが、最初はコーディネートが上手く機能しなかった。だんだんと体制が整い、町県内の人がボランティアで来るようになった。高校が休みだったので、高校生も来た。職員自身が何をしたら良いか分からない時に、ボランティアに説明し指示をすることは難しく、振り分けが大変だった。ボランティアには物品の仕分けや除雪をお願いしたが、プライバシーに関わる仕事はボランティアには頼めない。どの辺りまでボランティアに頼んでよいか分からなかった。避難所の運営が軌道に乗ってからは、避難所の職員2名体制を1名体制にしようという案はあったが、被災していないので職員だけでも十分に人手がありボランティアに全てをまかせようという発想はなかった。



避難者交流 子どもと一緒にランチ

エネルギーの在り方

大震災を経て、原子力発電がリスクを兼ね備えた物だと一般の人でも分かったと思う。これまでは、原発反対というより自然エネルギーを普及させようと言って、原発の存在そのものには触れないようにしていたところがあったが、多くの犠牲を出して、少しでも早く止めなければならぬと感じた。あの悲劇からたった1年半しか経っていないのに、目先の利益だけを考えて原発を動かそうとしていることが悲しい。昨年、私たちは節電をして乗り切ることができた。もちろん昨年の取り組みで節電が定着した部分はある。しかし、喉元過ぎれば熱さを忘れるということなのか。電気に不自由するならば原発も仕方がない風潮になっている気がする。なぜ制限令をかけないと人々は節電をできないのか。

東北は福島県が近いのでまだ原発の危険性に対する意識が高いが、西日本の方は温度差があるように思う。東日本大震災や原発事故のことをどれだけ覚えてもらえるのだろうかと不安になる。高島町は被害がほとんどなかったで、風化が心配だ。

火力発電に依存している以上、気候変動という地球規模の深刻な問題もあるのに、なぜ企業活動が停滞する、電気が不足しているという側面だけが強調されるのか。この異常気象に直面しても気づかないのか。電気が不足しているから再稼働、地球温暖化防止のためには原発という発想は疑問を感じる。地球温暖化防止の以前の問題だと思う。福島第一原発の事故はどれだけの影響があるのかは誰も分からず、専門家の意見も分かっている。福島市内から自主的に母子避難してきている方がいるが、子どものことを考えたらリスクは回避した方がよいと思う。核と人類は共生できない。原発のある地域には原発がなくても自立し生活が成り立つように別の産業を興すなど雇用対策が必要だ。

もっと私たちにできることはあるはずだ。私たちは今の暮らしの中で、便利・快適を求めすぎではないか、本当に必要なエネルギーとはどの程度なのかを考え直さねばならないと思う。

寄り添うことができたのか

高島町はこれまで地震などの自然災害が少ない地域だったので、こうした震災を誰も経験したことがなかった。役所では災害発生緊急時の割り当てはあるが、今回の緊急時には機能しなかった。職員が自分のできること、やるべきことを自ら判断して動く必要があると感じた。そうしないと現場で判断するのに時間がかかってしまう。住民を守るために、行政職員は能力を高めねばならない。災害の起きる曜日、時間帯、季節によってもさま



避難者交流 地元ケーブルテレビ収録

ざまな違いがあると思う。もしも休日だったら行政職員はすぐには対応できなかっただろう。日頃からさまざまな想定をしなければならぬと感じた。また、避難者にはさまざまな事情がある。障がいを抱えている方、子どもを心配する母親たち。そうした方を連れている避難者がワンフロアの避難所で過ごすことは、どれだけ大変だろう。自分ももしも避難者の立場だったら、きっとものすごく不安だろうなと思った。個別に対応できる場所もなく、施設も設備がなく、何とかしてあげたいがどうすることもできなかった。せめて食べる物だけは温かいものを提供したいと思った。ある時、避難所で小学生が「ごはんおいしい！」と言っておかわりをし、母親が「家では好き嫌いが多くて、おかわりなんてしたことないのに！」と驚いていた。そうした光景が活動の救いとなり、今でも忘れられない。「お世話になりました」と挨拶をして避難所から帰っていく姿も忘れられない。

山形県では自主避難者を含めて家賃補助をしているが、7月、今後も避難を続けるかどうかの調査をきっかけに、また少しずつ除染が進んでいることもあり、帰られる避難者もいる。

最初は県外からの避難者数は約500人だったが、現在は約300人でほとんどが母子避難だ(2012年10月5日現在)。子どもの保育園が見つかったり、環境に慣れてきたりしたことで落ち着き、短時間のパートをやりたいという問い合わせもある。これから自立して暮らしていこうという時、雇用は重要な課題だ。避難者はさまざまな事情を抱え、ニーズは多様化しているので本当に困っている方々に支援の手が届いているのか、私たちは常に問いかけねばならないと感じている。

これまでも避難者に本当に寄り添うことができたのか疑問を感じる。すべての要望を受け入れることはできないが、避難所を設置するだけで、果たして本当に心情的に寄り添うことができたのだろうか。他人事をいかに自分事にできるかが大切なのではないかと感じている。